

「クックハム邸の素描」:

17世紀英国の女性詩人によるカントリー・ハウス詩の一考察

岡 田 宏 子

“The Description of Cooke-ham”:

A Study of the 17th Century English Country House Poem

Written by a Woman Poet

Hiroko OKADA

英国17世紀の女性作家達のテキストが、近年大学教育用の英文学のアンソロジーに入ったり、文学史の一部に女性作家のセクションが取り入れられるようになったとはいえ、扱われ方は満足とは言い難いものもある¹⁾。作家をエミリア・ラニヤー（多くは Aemilia Lanyer と書くが、Emilia Lanier と綴る研究者もいる）に限って言えば、最近20年間の研究成果は目覚ましいものがある。ラニヤーは、英文学において、カントリー・ハウス詩のジャンルを創始した詩人として定評のあるベン・ジョンソンに先駆けて、彼より5年早い1611年に「クックハム邸の素描」(“The Description of Cooke-ham”)を出版していた。つまり、今までの定説に近いヒッパードの意見に、意義申し立てが出て、英文学史上最初のカントリー・ハウス詩は、実は女性詩人によって書かれたことが判明したのであった。この事実は、1994年にファウラー (Alastair Fowler) が編んだ、今までに出版された中で、最も多くの17世紀のカントリー・ハウス詩を集めたアンソロジー、*The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items* に既に反映され、ジョンソンの「ペンズハースト邸に寄せて」(“To Penshurst”)の前に「クックハム邸の素描」が収録されている。

本論の目的は、男性作家の「ペンズハースト邸に寄せて」との比較を試みつつ、女性作家の書いたカントリー・ハウス詩、「クックハム邸の素描」におけるジェンダーについて考察し、その読解を試みることである。ペンズハースト邸は、シドニー一族のカントリー・ハウスとして、今なおケント州のトンブリッジウェルズにその美しいたたずまいを見せている。「ペンズハースト邸に寄せて」は、詩人のベン・ジョンソンがペンズハースト邸に滞在し、彼のパトロンであるロバート・シドニーから中世風の大広間でうけた、貴族のノブレス・オブリジェそのものの、理想的な歓待に対して書いた、オード形式による礼状であった。一方、クックハム邸は、バークシャー州にあった王室に属するカントリー・ハウスであったが、現在は屋敷もそれを取り巻くマナーも存在しない。詩が書かれた時には、この詩を捧げられたカンバーランド伯爵夫人と娘が、ラニヤーと共に何年間に住んでいた。屋敷は、伯爵夫人の実家ラッセル家の弟ウィリアム・ラッセルが国王から借用していた。「クッ

クックハム邸の素描」は、三人がこの屋敷を出て、それぞれ別れて行く運命にあった時に書かれたので、このカントリー・ハウス詩は、よく指摘されているように、別れの詩 (valediction) のジャンルに属する。

本論に入る前に、「クックハム邸の素描」に関する周辺の事情を明らかにする必要がある。まず、クックハム邸から三人の女性が去らなければならなかった原因の一つは、簡単に言えば、カンバーランド伯爵夫人の一人娘、アンが、女性というジェンダー故に父親の財産とタイトルの相続ができなかったことであった。彼女達がクックハム邸から去らざるを得なかったのは、1600年代の最初の10年間のいつかのことであるという。

次に、詩人のラニヤーについて、簡単にふれなければならない。エミーリア・ラニヤーは、音楽好きのヘンリー8世の時代に英国へ来た、ユダヤ系イタリア人の宮廷音楽家と英国人の母の間に1569年にロンドンで生まれた。クックハム邸に滞在した頃、彼女は30代から40代にさしかかろうとしていた。彼女は、やはり宮廷音楽家と既に結婚して息子もいたが、彼は音楽家としての修行に出ていた。夫はエセックス伯の海外遠征には2度も参加するなど、様々な活動に身を乗り出したものの、ナイトにも叙せられず、彼等の生活は窮乏に陥っていった。二人の生活の詳細に関する文献はごく僅かで、エミーリアが通った占星術師、サイモン・フォーマンの、これもあまり多くない記録以外に殆ど存在しないが、17世紀の最初の10年くらいは別々に暮らしていたらしい。エミーリア・ラニヤーは、多分、クックハム邸において、ジェントルウーマンとしてカンバーランド伯爵夫人、マーガレット・クリフォードと娘アンに仕えていたと推測されている。

伯爵夫人は1577年にエリザベス女王臨席の下に、盛大な結婚式をあげたのだが、父の被後見人であった、夫ジョージ・クリフォードとの確執のため、クックハム邸に娘アンと住んでいた。伯爵夫人は1605年、夫の死の前に夫と和解はしたものの、夫は財産と爵位とを娘のアンにではなく、彼の弟フランシスへ相続するべく遺言を書いていた。マーガレットは二人の男の子を幼くして失って、子供は女の子のアン一人であった。英国にはその時既に、エドワード2世以来、相続は男女を問わず子供であれば可能であるという慣習法があったので、アンは相続が可能であったにもかかわらず、彼女の権利は認められなかった。父系相続、そして男子の長子相続制の枠組みはひどく堅固なものであった。アンの相続権は、叔父の息子が相続不可能になった時にはじめて生じることとなった。

従って、カンバーランド伯爵夫人は、夫の死後、夫の土地や屋敷がすべて夫の親族の手に渡ったため、1608～9年に娘のアンがドーセット伯爵、リチャード・サックヴィルと結婚するまで、クックハムに住んでいたのである。伯爵夫人は、夫の死後、すぐさま夫の遺産への娘の相続権を主張して、ジェームズ1世や宮廷の官僚まで敵に回して、訴訟を開始し、父権制社会の父の法に対して果敢に挑戦し、1616年に死ぬまで戦い続けた。クックハム屋敷は、皮肉にも王室に属しながら国王の権力や官僚制、父権制に挑む女性の主体の砦としてのカントリー・ハウスとして、しばらくは機能していたのだ。

けれども、それも長くは続かず、どのような事情かはっきりしないが、アンの結婚の時、クックハム屋敷における、3人の女性の理想的な楽園とも言うべき生活の終焉の時であったらしい。女性が母系制社会から父権制社会に、結婚という制度により組み入れられる時、女性のためのパラダイスとしてのカントリー・ハウスは消滅しなければならなかった。クックハムとその男の主人ではない、女主人であるカンバーランド伯爵夫人母娘との別れ

「クックハム邸の素描」

の悲しみを軸にクックハム邸を描いたのが、「クックハム邸の素描」という作品である。

実際、これは一編の独立した詩ではなく、1611年に出版されたラニヤーの『ユダヤの王であるイエス、万歳』(Salve Deus Rex Judaeorum)という宗教詩の最後につけられたものである。普通、単独で論じられる場合が多いが、210行の「クックハム邸の素描」は、キリストの受難をテーマとする1800行余りの長い詩、そして、その前に付された9人もの高位の貴族の女性達に捧げられた献呈の詩や散文と切り離しては解釈ができないという点で、一編で完結的な「ペンズハースト邸に寄せて」とは異なり、カントリー・ハウス詩として独自の世界を形成していると言える。

女性のカントリー・ハウスについて、女性詩人が書いた詩の重要性を明らかにするためには、『ユダヤの王であるイエス、万歳』が出版された1611年前後の英国の女性観について、多少述べる必要がある。当時の強力な父権制社会にあって、女性に求められた美德は、貞節、寡黙、そして従順であった。エリザベス1世の頃は、ヒューマニストの影響もあって、上流社会における女子教育はある意味で盛んであったが、ジェームズ1世朝になるとそのやり戻しがあり、女がペンを持つことは、社会的規範からの逸脱行為であった。ことにこの頃、世俗的な詩や演劇やパンフレットなどで、女性の悪徳への非難や攻撃が喧しさを増していた。そんな歴史的な情勢下、ジャネル・ミューラーも指摘するように、世間では世俗詩から宗教詩への文学的エネルギーの方向転換も求められていた²⁾。折りしも、同年には、ジェームズ1世の『欽定英訳聖書』が出版され、一方、男性作家のジョン・ダン(John Donne)は『第1周年詩』(The First Anniversary)を出版した。これは、15才にもならないうちに早すぎる死をとげた少女、エリザベス・ドルーリーの親に依頼されてダンが書いた、愛娘の一周忌を悼む詩であった。見も知らぬ少女に敬意を表するのは、親に対する気遣いであったと考えられるが、ダンは明らかに当時の女性嫌いの男性社会の風潮を意識して、それに一石投じるかたちで葬送のエレジーを書いた。無名の一少女の死が恰も世界の本質の死をもたらしたかのように、その死を誇張的なまでに大仰に嘆いて、ベン・ジョンソンが、キリストの母マリア様にならともかくと、あきれ果てたほどの女性賛美をダンは行ったことになった。

このような時代のコンテキストの中で、女性の守るべきパウロ的な「寡黙」の美德を公然と破って出版された、ラニヤーの宗教詩『ユダヤの王であるイエス、万歳』は、キリストの受難を主題にしながらも、女性の視点から女性のジェンダーを世の非難から擁護した、女性のオリジナルな詩の作品として特異なものであった。また、同時に、娘のアンですら、『日記』の中で信仰の深さを褒め称えているほど、真のキリスト者としての魂の体現であるカンバーランド伯爵夫人の美德をラニヤーが賞賛する個人的な側面ももっていた。

従って、ジョンソンは、「ペンズハースト屋敷に寄せて」において、屋敷の建物を賞賛することによって、主人の美德を賞賛するレトリックをもちいたが、ラニヤーは、『ユダヤの王であるイエス、万歳』の長詩本体において、随所でカンバーランド伯爵夫人を賛美しているので、最後に付された、カントリー・ハウス詩、「クックハム邸の素描」において、改めて同じことを繰り返す必要はなかった。

しかし、せっかく世の禁をものともせず出版にこぎつけた『ユダヤの王であるイエス、万歳』は、結果的に公的にも個人的にも、黙殺されてしまうテキストとなった。献呈の詩を捧げた高貴の女性誰も彼女のパトロンにはならなかった。ラニヤーの作品に関して、

同時代の誰かが言及している事実は、現在のところは皆無である。同じ1611年に出版された欽定聖書の文学的なインパクトの大きさは言うまでもない。また、ダンの作品も同時代の作家に様々な影響を与えて、文学の正典の一部に地位を築いているが、母からの薫陶を得て膨大な『日記』を残している、ラニヤーに最も近い筈のアン・クリフォードですら、『日記』の中で彼女についても、また彼女の作品についても全く触れていない。『ユダヤの王であるイエス、万歳』は、2刷ほど版が重ねられているが、印刷部数は少数であつたらしく、現在9冊が残っているのみである。この作品は、20世紀最後の20年ほどの間に、それが書かれて以来、最も多くの人に、特に女性の読者に読まれるまで、全く失われてしまった文学的テキストであつた。

このように、作家の女性のジェンダー故に、抹殺されていたこのテキストは、今世紀において、今度は作家の女性のジェンダー故に発掘されることとなった。ラニヤーについての記述は、意外なところにあつた。チューダー朝の文学というより文化の研究者であつたラウス (A. L. Rowse) が、ある時期の彼女についての記録が、エリザベス朝期に占星術師として名を馳せた、サイモン・フォーマンの『事例記録集』(現在はボードレイ図書館にある) にあつたことを発見した。彼は、その記述をかなり牽強附会して解釈、1609年に出版されたシェイクスピアの『ソネット集』に出てくる、ダーク・レイディが、実はラニヤーであると断定し、『ユダヤの王であるイエス、万歳』のテキストを、『シェイクスピアのダーク・レイディの詩』と題して、1978年に出版したのであつた。

ラニヤーは、若い頃エリザベス女王の内務大臣、ヘンリー・ハンズドン卿の愛人であり、宮廷にも近づく機会をもっていた。卿は、彼女が身ごもると、1592年に23才の彼女をフランス人の宮廷音楽家アルフォンソ・ラニヤーと結婚させてしまった。ラウスはシェイクスピアが、内務大臣一座の座付き作者であつたから、身持ちの良くないラニヤーはシェイクスピアの恋人でもあつた可能性は高いという、誰もが信じない説を唱えた。ラウスはこのような大胆すぎる仮説を唱えながら、実は、今まで隠れていた立派な女性詩人を世に復活させるという大仕事をしていたのであつた。本人はそれほどの認識はなかったかもしれないが³⁾。

それから10年後の1988年には、アメリカのブラウン大学で WWP (Women Writers Project) が、スーザン・ウッズ (Susanne Woods) を中心に立ち上げられ、その成果は、同じくウッズが編集責任者である、Women Writers in English 1350-1850 と銘打ったシリーズとして、オックスフォード大学出版局より次々に出版されている。おかげで中世からヴィクトリア朝までの入手不可能であつた女性作家のテキストを、優れた注付きで読むことができるようになった。そのうちの一冊は、勿論、ウッズの編集による『ユダヤの王であるイエス、万歳』のテキストであり、本稿もそれを用いている⁴⁾。

「クックハム邸の素描」の分析に入る時、興味深いのは、この女性によって創り出されたカントリー・ハウス詩という新しい詩のジャンルは、その後に続いたジャンルの伝統の枠組みを、破ることによって始まったということである。冒頭から、「さらば、クックハムの館よ」「Farewell (sweet Cooke-ham)」と、語り手のラニヤーは、クックハムの屋敷に別れを告げているのだ。クックハムは、最初から去られるべき女性の家なのである。既に述べたように、カンバーランド伯爵夫人は、不仲であつた夫の生前から娘を連れて、クックハム邸に、ウルフ流に言えば、「自分自身の家」という空間を確保した。クックハムには、男

の主はいない。女性の家長が存在し、母と娘が、そこでレワルスキーの主張してきた、女性の共同体、また楽園とも言える場所をラニヤーと三人で築いていた⁵⁾。

ジョンソンの「ベンズハーストに寄せて」は、男のあるじ、ロバート・シドニー卿の屋敷についてのカントリー・ハウス詩であった。ベンズハーストは、実際はどうであれ、他の不在地主と違って、あるじが常に留まる屋敷であり、家系としての家の存続が安泰な家父長制社会の典型的なモデルの家であった。リア・マーカスが論じたように、「ベンズハーストに寄せて」は、17世紀の初め、都市化した貴族に対して出された、ロンドンから領地である田園へ帰り、等閑にされて疲弊した地方を良く治めるようにというジェームズ1世の帰郷令の政策に沿った、田園生活の賛美という政治的意図に忠実に沿ったカントリー・ハウス詩であった⁶⁾。そのためにも、「ベンズハーストに寄せて」においては、当時の虚飾の家、即ち、宮廷での出世を経済的な基盤にした新興成金の貴族であることが多かった不在地主の建てた、国王の行幸を受け入れることが可能であり、かつ権力を誇示するための巨大な規模の華美なカントリー・ハウスと、ジェームズ1世も狩の途中にふと立ち寄ることがせいぜいである、質素でつつましやかな地方に根付いたベンズハースト屋敷との二項対立の図式は格好であった。

ベンズハーストと対照的な虚飾の家として非難されていたカントリー・ハウスは、国王の行幸の宿になるために、大掛かりな改修を行っていた近くのノール (Knole) であったかもしれない。経済的に困難な状況にあったロバート・シドニー卿が、ノールの建物やマナーなどの拡張振りをかなり意識していたため、ジョンソンは塙を修理するほどの余裕しかないパトロンを慰めるために、「ベンズハーストに寄せて」を執筆して、当時はもう過去のものとなりつつあった、広間の大宴会に象徴されるカントリー・ハウスのホスピタリティーの美風や、中世風の名残の強い、カントリー・ハウスの所有者と村落との間に結ばれている共同体としての紐帯を賛美したとも言われている。1608～9年にアン・クリフォードが、クックハムを出て結婚のため入った先は、シドニー卿の意識して止まなかったサックヴィル家のノールであった。

主に屋敷の立派さの賞賛を通して、屋敷の所有者の美德を褒め称えるのがカントリー・ハウス詩の基本的なプロットであり、同様に大切なのは、子孫が繁栄しその家の継続が未来に保証されていることであった。クックハムにおいては、批評家達が指摘するように、屋敷の建築に関する叙述は殆ど無い。それは、屋敷が国王の所有物であり、その賞賛はその時の屋敷の女主人の賞賛にはなり得ないからではなかっただろうか。

女主人、カンバーランド伯爵夫人への賞賛は、詩を書くラニヤーを育てたことと、彼女の宗教的回心を助けたことに対し、感謝の念を表明することによって行われている。ラニヤーは、宮廷音楽家の娘や妻でしかない、いわば宮廷の端にやっと縋り付いている低い身分の出身である。従って、彼女は、クックハムでは、アンの日記に名前が出てくる女家庭教師、タイラーの不足を補って、フランス語やイタリア語と音楽をアンに教えていたのではないかと推測する研究者もいる。マーガレット・クリフォードは、伯爵夫人という高い身分にありながら、召使に近い身分であったかもしれないラニヤーとの間に、知的、宗教的なレヴェルにおいて彼女を教育するという精神的な関わりを持ち、真の人間関係を構築していたのだ。ジョナサン・ゴールドバーグは、それ以上に踏み込んで、二人の間にレズビアン的な関係があっても不思議は無いと論じているが、彼の論を支持する証拠がテキス

ト及びそれ以外から得られるかどうかは、疑問が残る⁷⁾。

しかしながら、少なくとも、クックハム邸でラニヤーが『ユダヤの王であるイエス、万歳』を執筆していた間は、彼女とカンバーランド伯爵夫人は、英文学史上初めての女性パトロンと女性詩人の関係をむすんでいたと言ってもよいかもしれない。「クックハム邸の素描」の最初の6行は、そのようなラニヤーの自己形成の過程が、簡潔にしかも十分に語られている。

Farewell (sweet Cooke-ham) where I first obtain'd
Grace from that Grace where perfit Grace remain'd;
And where the Muses gave their full consent,
I should have power the virtuous to content:
Where princely Palace will'd me to indite,
The sacred Storie of the Soules delight. (ll. 1-6.)

一人称の語り手は、詩人自身である。ラニヤーにとって、クックハムは留まるべき家ではなく、立ち去るべき家であるが、既に指摘したように、そこは彼女の人生にとって意義深い所であった。2行目の3回繰り返される“Grace”について、ウッズは、最初がカンバーランド伯爵夫人のラニヤーに対する“favor”を意味し、次が“the noble person”，勿論それはカンバーランド伯爵夫人を指し、最後は“god-given virtues”，つまり夫人の天賦の美德を表わすと注をつけている。しかし、最初の“Grace”は、むしろ信仰と解釈するべきで、ユダヤ系イタリア人を父に持つ彼女が、父の家紋が蚕と桑の木であったからと言って、ユダヤ教からアングリカンに改宗したというよりは、信仰心の篤い夫人の影響でさらに深い信仰を得たことが、クックハム屋敷においてラニヤーが受けた恩恵の第一に重要な点であった。

第二には、3行目にあるように、ミューズは、“Muses”と複数で表記されているので、9人の女神達を指すかもしれないが、多分、主に詩人としての自分を夫人が育ててくれて、文学を解する人々に満足を与えられる作品を著す力を磨くことができたことである。第三は、『ユダヤの王であるイエス、万歳』という聖なる物語を書くように導いてくれたことであった。彼女は人生の転回点とでも言うべき30代の何年間かを、伯爵夫人母娘に仕えつつ、詩人として、またキリスト者としての真の自己確立へ向かって、自己を磨くことができた。『ユダヤの王であるイエス、万歳』の所々には、ラニヤーの抱いていた階級の差異への強い意識が見られるが、特に開明的な貴族を除けば、殆どの貴族ですら女性の知的な活動を逸脱行為と考えた時代に、カンバーランド伯爵夫人は、ラニヤーを身分の違いも超越して教育し詩人に育てた。主従が女性であったため、社会に立ちだかっていたジェンダーの障壁を、主人側は身分の低い女性にも教育を行うことによって、仕える身分のラニヤーは、創作しそれを出版して自己のメッセージを社会へ公的に発信することにより、クックハムは、父権制社会に挑戦し、独創的な女性の文化を育んだカントリーハウスであった。

一方、ジョンソンの描写するベンズハースト屋敷の女性は、シドニー卿の妻である。プロテスタンティズムの結婚観の規定する、内助者（helpmeet）としての妻であり、卿の12人もの子供達の母として、正統な嫡子を生み育てる者、ジェームズ1世が“her high

housewifery” (l. 85.) と賞賛を惜しまなかった家政の担い手である。夫が宮廷に出仕して不在の間は、カントリーハウスの経営もともしきり、家父長制社会を支える存在である。ジョンソンは、彼女が、気高く、夫に貞節を守る多産な妻であることを、割に冷めた目で見ている。

Thy [Penshurst's] lady's noble, fruitful, chaste withal.

His children thy great lord may call his own:

A fortune, in this age, but rarely known.

(“To Penshurst”, ll. 90–92.)

シドニー卿夫妻がお互いに慈しみ合った夫婦であったことは、良く知られている事実である。彼が子供達を自分の子だと言えるのは、当世にあつては滅多にない幸運なのだという、いささか皮肉をこめたジョンソンの語り口には、当時のモラルの乱れが推測される。彼女が英国の近代初期において、貴族階級の女性としてシドニー家の家族の中で果たしたジェンダーの役割は、今もペンズハーストにかかる1596年頃、マーカス・ギラーツの描いた家族の肖像画に読み取ることができる。ドン・ウエインは、この絵の構図と家族のジェスチャーが、いかにジョンソンの詩や、残っている夫妻の取り交わした手紙の内容と一致するイデオロギーを表象しているかを鋭く指摘している⁸⁾。

家族の肖像画であるのに、母子のみが描かれ、シドニー卿という家父長の姿は不在である。絵画は、シドニー卿が実際不在がちで、母子家庭である事が多かったペンズハースト屋敷の日常を、ジョンソンの詩よりは正直に語っているかもしれない。シドニー家の12人の子供は、女8人、男4人であったが、男の子2人は幼くして亡くなった。絵には夫人のバーバラと男の子二人、女の子は全員ではなく4人のみが描かれている。画面の中心には、夫人ではなく、シドニー家の跡を継ぐ筈の年上の男の子、ウィリアムが立ち、羽のついた帽子を左手に持ち、細身の剣を右の腰に下げて、幼いながらも男性のジェンダーを持ち物によって図像学的に体现している。中心から左にはずれて、夫人が立ち、長男を支えるかのように彼の肩に左手を添えている。彼女の右手は隣の椅子にかけているらしい幼い次男ロバートに添えられている。長男の右には、少し離れて年上の女の子が二人、母の姿勢を真似るかのように互いに手を添えあつて立ち、更にそれより年下の女の子二人が次男の椅子の前に、やはり母の姿勢を繰り返して、姉が妹の肩に手を添えて立っている。

画面に占める長男の中心の位置や、物を持っている人は他に誰もいないのに、長男のみが威信と権力を象徴する武器である剣を帯びている。それに加えて、一族の存続を保証する長男を特別に手厚く世話をする母の仕草と、育てる者としての母の仕草を娘達がそれぞれ真似して繰り返す振る舞いの連鎖は、家父長制下の男と女のジェンダーのありようを如実に示す典型的なイコロジーを形成している。ウエインは、シドニー家の肖像画に、女が子供を養育するものとする女の性別役割分担が、この頃に定着しはじめる徴候を読み取っている。

この肖像画の中では、家父長制下のジェンダーによる社会化された役割に甘んじて、弟に権威の距離を許して立っていた、一番年上の女の子、メアリーは、長じてその枠組みから抜け出した。彼女は、ジョンソンも「エピグラム」の中であまり評価していない、ロウス卿と結婚したが、ラニヤーの宗教詩の出版より10年後の1621年に作品集を出し、文人一

族の面目を施した。メアリー・ロウスは、人間的にも個としての強烈な自覚を持ち、多作で様々なジャンルの作品を女性として初めて書いた、英文学史上重要な女性作家である。

既に述べたように、シドニー族の子孫は、ペンズハーストに現在も尚住み続けているが、クックハムは屋敷もそれを取りまくマナーも残ってはいない。ラニヤーが詩の最後の部分で予言したように、クックハムはこの詩の言葉の中に生きているのである。夫の女性関係がもとで、別居して暮らしたカンバーランド伯爵夫人は、生家の文化的伝統を受け継いで、詩人たちのパトロンとなり、文化的な活動に熱心であった。詩人サミュエル・ダニエルが、娘アンの家庭教師の一人であったが、夫人はクックハムについて記念の詩を書くことを、名声を馳せているダニエルに依頼しないで、女性でかつ無名の、召使に近い身分であったようなラニヤーに頼んだらしい。

カントリー・ハウス詩の中で、屋敷の持ち主に屋敷または、そのマナーについて、所有者が詩の創作を依頼して書かれた例は、ファウラーのアンソロジーに収録されている70編余りの中にも、この詩以外に無いように思われる。ラニヤーは、「クックハム邸の素描」においても、『ユダヤの王であるイエス、万歳』においても、次のように書いている。

Yet you (great Lady) Mistris of that Place,
From whose desires did spring this worke of Grace;
(“The Description of Cooke-ham”, ll. 11-12.)

And pardon (Madame) though I do not write
Those praisefull lines of that delightful place,
As you commaunded me in that faire night,
When shining Phoebe gave so great a grace,
Presenting *Paradice* to your sweet sight,
Unfolding all the beauty of her face
With pleasant groves, hills, walks and stately trees,
Which pleasures with retired minds agrees. (Salve Deus Rex Judaeorum, ll. 17-24.)

「クックハム邸の素描」の12行目の“this worke of Grace”は、宗教詩の本体ではなく、カントリー・ハウス詩、「クックハム邸の素描」を指していると思われる。『ユダヤの王であるイエス、万歳』では、括弧内の“Madame”は、当然カンバーランド伯爵夫人である。ラニヤーは、カントリー・ハウス詩ではなく、キリストの受難をテーマにした宗教詩を書く、言い訳を伯爵夫人に述べているのだ。「あの美しい月夜に、月が最も美しい光で、気持ちの良い木立や丘や散歩道、そして立派な木々を照らして、パラダイスのようなクックハムをあなたの美しい御目に示して見せ、世を捨てた私たちの心はその美しさに同じ感銘を受けました。その時私に書くようにお命じになった、あの素晴らしい場所を賞賛する詩を書いてはおりませんが、お許し下さい。」

18行目の“that delightful place”は、「クックハム邸の素描」の32行目においても同じ言葉で繰り返され、古典文学の *locus amoenus* や、キリスト教的なエデンの園を想起させる。木立や丘や散歩道、そして立派な森は、クックハム屋敷の自然のことである。17世紀の初

め、ろうそくの光で夜を過ごしていた生活の中で、多分満月の光を浴びた自然の風景は、現在の我々が見る以上に美しいものであったに違いない。

引用の最後の複数形である“retired minds”は、伯爵夫人とラニヤーの心を指している。二人とも、今は世俗を捨ててしまった身であると、言っているのである。カンバーランド伯爵夫人は当然のことながら、ラニヤーも年代ははっきりしないが、かつて、宮廷に近づける場所にいたことがあった。『ユダヤの王であるイエス、万歳』の献詩の一編は、ケント伯爵未亡人、レイディー・スーザンに捧げられ、その冒頭の2行で、“Come you that were the Mistris of my youth, / The noble guide of my ungovern’d dayes”と、幼い頃彼女に育てられたことがあるかの表現をしている。それは、宮廷音楽家の彼女の夫が、宮廷の高位高官を知っていたように、宮廷音楽家のラニヤーの父バプチスト・バッサーノは、身分の高い貴族にも近づく機会があったからであろうか。

その上、若い時に一時、エリザベス女王の内務大臣、ヘンリー・ハンズドン卿の愛人であったラニヤーは、宮廷へ行く機会もあった筈である。また、夫はロンドンに住み、身分違いの宮廷人や友人のつてで、様々なことに手を出していたらしい。いつからか、何のきっかけかは定かではないが、彼女はロンドンという都会からクックハム屋敷に住んでいて、ある意味で世捨て人になっていた。彼女は、ジェームズ1世の後を含めて9人もの貴族の夫人達に献呈の詩を捧げていても、『ユダヤの王であるイエス、万歳』の中で終始意識して止まない人物は、カンバーランド伯爵夫人であった。ラニヤーの伯爵夫人賛美の第一は、夫人が世俗的な宮廷から遠ざかり、クックハムのような田舎へ隠棲して、信仰に深く傾倒している点であった。

Thou from the Court to the Countrie art retir’d,
Leaving the world, before the world leaves thee: (Salve Deus Rex Judaeorum, ll. 161–2.)

But, thou, the wonder of our wanton age
Leav’st all delights to serve a heav’nly King: (Salve Deus Rex Judaeorum, ll. 169–170.)

宗教詩とカントリー・ハウス詩において重なり合う基本的スタンスは、腐敗した宮廷や墮落した都市から、身をひいて田園に身をひそめるライフ・スタイルの賛美である。「世間があなたを捨てる前に世間を捨てて、宮廷から田園に退き」「すべての快楽を捨てて、神に仕える」カンバーランド伯爵夫人は、「乱れた現代の奇跡」であるのだ。そのように信仰心の篤い夫人は、「クックハム邸の素描」において、この世にたった一羽しかいない伝説上の珍しい鳥、「不死鳥」(44行目)に喩えられている。

カンバーランド伯爵夫人は、世間が彼女を捨てる前に「世間を捨て」たのは、単に宗教への逃避や耽溺ではなく、篤い信仰で心を鍛え、家父長制社会の財産権に関するジェンダー差別に積極的な抵抗と挑戦を行うためであった。夫の生前は、夫との不和に苦しみ、夫の死後は、ひとり娘が、女であるが故に、夫の遺言により、受け継いで当然の夫の財産も身分も相続する権利を失うという、近代初期に生きた貴族の女性の存在理由を根底から覆す最悪の状況に投げこまれながら、彼女は敢然と娘のアンのために立ち上がった。その拠点、クックハム屋敷であったのだ。

アンは1589年に生まれているから、クックハム屋敷で過ごした1600年代には10代の少女であった。彼女が1608年かその翌年に、ドーセット伯爵、リチャード・サックヴィルと結婚し、母の娘から彼の妻という新しい身分になる時が、そして母のカンバーランド伯爵夫人は、既に未亡人であったことが、母子の女性の系譜を砕いた⁹⁾。また、それは、ラニヤーも含めた3人の女性の作っていたクックハムという女性のバラダイスの瓦解の時であり、彼女達には再びそのような楽しい場所は戻ることはなかった。カンバーランド伯爵夫人母子は、娘の結婚後も書簡をとりかわし、共同戦線をはって財産権を主張する裁判を続けた。レワルスキーは、これについて「家庭内政治」と評しているが¹⁰⁾、単に個人的な姻戚関係の者の間の財産争いではなく、ジェームズ1世も巻き込んでの係争であったからには、女性の財産権についての、家父長制の英国社会に対する普遍性をもった異議申し立てであった。

それに対して、ペンズハースト屋敷は、いわば英国という国家の小宇宙的な空間として、国家の構造に組み込まれたカントリー・ハウスであることが、それ自体の存在理由であった。ペンズハースト屋敷における生活の楽しみのハイライトは、平土間に囲炉裏がたかれ、煙がたちこめるアメニティー零度の、中世のままの大広間における身分の差を問わない無礼講に近い宴会であった。古典の常套である自発的豊穰性を誇る、屋敷内の自然の恵みは、宴会のテーブルのご馳走となり、家族も客も召使も、村の人々もテーブルの周りへ集まる。ペンズハーストのすべては、大広間のテーブルに収斂し、それは即国家へとつながっていく。女性の男性への従順、家族や、召使そして村落の人々の家父長への従順、テーブルへみずから飛び込んでいく川の魚のイメージを象徴する、邸内の自然の家父長への従順の鎖は、最後に家父長の国王への従順で終る。

ペンズハーストの自然の豊饒性の言説には、女性を自然と同一視するものがある。シドニー夫人、バーバラ・ガミッジが産気づいたのは、後に“lady's oak” (“To Penshurst”, l. 18) と呼ばれるようになった樫の木の下であった。彼女は子孫の命を生み出す者として、このように自然と同一視され、父系の長子相続制という支配のシステムの中で、この木を媒介にペンズハーストという土地に縛られている。また、彼女は自然の産物を育てはぐくむ者でもある。この木の下でシドニー卿夫人は、鹿まで飼育していたのだった。鹿の肉は、当時の大広間の宴会のテーブルでは、美味しいご馳走であったのだから。

.....lady's oak.

Thy [Penshurst's] copse, too, named of Gamage, thou hast there,

That never fails to serve thee seasoned deer.....

(“To Penshurst”, ll. 19–20.)

クックハムの自然は、カンバーランド伯爵夫人と同一視されるのではなく、彼女の存在によって統御されるものであった。彼女の到来に対する自然の反応は、まさにラスキンが名付けたパセティック・ファラシーと呼ばれる手法で、描かれている。

Oh how (me thought) against you thither came,

Each part did seeme some new delight to frame! (ll. 18–9.)

「クックハム邸の素描」

伯爵夫人の帰館が予告されると、それに備えて屋敷も自然も敏感に反応し、それぞれが彼女を歓迎するために、美しく装うのである。一度しか言及されない屋敷の建物も例外ではない。「クックハム邸の素描」における家は、ペンズハーストと違って、家のありようは全く問題ではない。マーヴェルのアップルトン屋敷が、フェアファックス將軍をいれるには小さすぎる容器であると表現されたのと似て、クックハム邸は彼女の本質とは無関係で、ただ伯爵夫人を迎えるために美しく整えられるべき建築物にすぎない。

The House receiv'd all ornaments to grace it,
And would indure no foulness to deface it. (ll. 19-20.)

自然も屋敷も共に、カンバーランド伯爵夫人に敬意を払い、一番良い状態で過ごしてほしいとの願いをこめて、散歩道も、木立も、川も、丘も、森も、小鳥や風もそれぞれ準備に余念がない。列挙されている自然の部分は、ペンズハーストにも書かれている、カントリー・ハウスの立つマナーにある典型的な場所である。それらは擬人化されて、伯爵夫人に享受してもらう“new delight”を工夫するために余念が無い様子がパセティック・ファラシーの手法によって描写されている。

クックハムにおいては、ペンズハーストのように豊かな農産物の生産を誇る自然ではなく、美しく装うことにより豊かさもあふれ、伯爵夫人の快適さが増すアメニティーの原則が支配する自然がある。カントリー・ハウス詩の伝統では、季節は殆ど春であるが、クックハムでは、活気に満ちた夏が彼女を迎える。

The Walkes put on their summer Liveries,
And all things else did hold like similies:
The Trees with leaves, with fruits, with flowers clad,
Embrac'd each other, seeming to be glad,
Turning themselves to beauteous Canopies,
To shade the bright Sunne from your brighter eies: (ll. 21-6.)

自然が緑豊かに茂る様を、散歩道は伯爵夫人という貴族の召使であるから、それに相応しく夏の「お仕着せ」を着、ほかのものもそれに習うと、主従の関係のメタファーを巧みにおりこんでいる。「葉や実や花で着飾る木々は、／喜びのあまりお互いに抱擁しあっているかのように見えながら／あなたの太陽より輝く目からさえぎるために／美しい天蓋にもなるのです。」

この引用の、アップルトンハウスにある、マーヴェルのデンドロ・エロチシズム（樹木愛）をふと想起させるような24行目の表現からは、クックハムの屋敷の内部のみならず、屋敷をとりまく自然の中にすら、女性的な共同体が形成されているかのようなのである。35行目から36行目にかけてでは、伯爵夫人が丘を登るときに、へりくだって低くなる丘は、彼女が足を踏み出すと、それを助けようと高くさえるのだ。ここには、貴婦人に礼儀正しく振舞う紳士ではなく、細やかなサービスを惜しまないで、心から仕える女性の召使を読み取る方が適切ではないだろうか。クックハムの自然はすべてが、彼女に「仕えることを

名誉に思つて」(46行目) いるのである。

伯爵夫人が狩を楽しんだことにふれる51行目から、クックハムの領地は狩が可能なほど
 広大であったと考えられる。森の中でひとときわ高い檜の木陰は、伯爵夫人のお気に入りであ
 った。そこから見渡す風景は、「国王の目を喜ばせるのに相応しい見晴らし」(72行目)
 で、ヨーロッパにも類がなく、13州が見渡せるとラニヤーは書いている。けれども、その
 誇張的な表現は、伯爵夫人が、眼前の素晴らしい風景を、高みからの政治的眼差しで眺め
 るのではなく、全く逆に、自らの心の内面を奥深くを照射する瞑想の視線で見つめる信仰
 の人であったことを強調しているのである。

What was there then but gave you all content,
 While you the time in meditation spent,
 Of their Creators power, which there you saw,
 In all his Creatures held a perfit Law;
 And in their beauies did you plaine descrie,
 His beauty, wisdom, grace, love, majestie. (ll. 75-80.)

クックハムの美しい自然には完全なる秩序があり、それこそが神の啓示がしめされてい
 る「生き物の本」である。その美しさの中に、神の叡智、恩恵、愛そして荘厳さを、はっ
 きり読み取り、可視的な見晴らしを神の永遠の時につなげるのである¹¹⁾。

アップルビー城で描かれた肖像画の彼女が詩篇を持っているのを見ると、伯爵夫人の森
 の散歩の時の瞑想は、聖書を携えてであったという84行目の描写は、多分彼女の日常の姿
 を描いているのであろう。丘に登るときは、モーゼが神聖なシナイ山の頂きに神に召され
 て登ったことを思い、朝な夕なにダビデの詩篇を口ずさんでいた。瞑想や祈りに一生懸命
 励むばかりでなく、夫を亡くし、娘の相続権も失って、運命は下降線を辿っていた彼女で
 あったが、飢えた人々には、自分をエジプトへ売った兄弟が飢えた時に食べ物を与えたヨ
 セフのように、施しをしばしば実行し、真のノブレス・オブリジェを行っていた。

木陰は、瞑想の場であったばかりか、伯爵夫人の私設の野外の学びやでもあった。英国
 の厳しい冬は別として、お気に入りの木陰は、夏には爽快な読書の場所であったのだ。

Where many a learned Booke was read and skand
 To this faire tree, taking me by the hand,
 You did repeat the pleasures which had past,
 Seeming to greive they could no longer last. (ll. 161-6.)

アンがまだ結婚前のこと、彼女が親しくラニヤーの手をとってくれて、カンバーランド
 伯爵夫人と三人で何度も木陰へでかけ、そこで難解な本を読んで、議論をし合った楽しい
 過去の思い出は、悲しいことにもはや続けることはできないのだ。17世紀の初めに、貴族
 の間で図書室をカントリー・ハウス内に作るが始まり、後半には普通のことになった¹²⁾。
 カンバーランド伯爵夫人や娘の肖像画には、背景の棚に数はあまり多くないが、積み重ね
 られた書物が描き込まれている。それらの書籍こそ、衛示的消費として図書室に蒐集され

た書籍ではなく、ラニヤーも含めて3人の女性達と、真の意味でのロゴスとの触れ合いを可能にしたまさに本当の意味の書籍であったかもしれない。この教育の成果より、ラニヤーには、女性として最初の宗教詩の出版を実現させ、アンは、読書と執筆を、彼女の自己定義と、家父長制に対する抵抗の重要な根幹となし得たのであった¹³⁾。

アンと別れる淋しさを、ラニヤーはお互いの身分の違いを下から見上げる視点で分析している。なんと言っても、アンは伯爵の爵位を持つ、名だたるベッドフォード家出身の母とクリッフォード家出身の父の娘であり、同じく伯爵のリチャード・サックヴィルの妻となる貴族のサラブレッドである。アンの立派な縁組に対しても、3人の女性のパラダイスを破壊する契機となるので、ラニヤーは“Unconstant Fortune” (l. 103)、そして“blind Fortune” (l. 126) と恨みがましく、手厳しい。

Unconstant Fortune, thou art most too blame,
Who casts us downe into so lowe a frame,
Where our great friends we cannot dayly see,
So great a difference is there in degree. (ll. 103-6.)

引用の最後の2行の“great”の繰り返しに、身分は伯爵夫人と身を持ち崩した宮廷音楽師の妻と「大きく」違いますが、「素晴らしい友達」であったのに、不実な運命の女神のために、日々親しく会えなくなる淋しさを嘆き、身分の下の者の方が、相手を思い遣る心がより深いと、ラニヤーは自らの心情を訴えている。

ジョンソンが、ペンズハーストで詩人の自分がシドニー族に、広間の宴の客として他の貴族達と平等にもてなされたマナーを、新興成金貴族と比較して賞賛した背後には、既にジェームズ1世の宮廷で出世していた彼の階級上昇志向があるが、ラニヤーはそれとは対照的に、ただ運命である出自で決まる階級の理不尽さを冷静に真正面から受けとめている。彼女に可能なことは、17世紀の人々の典型的な心情であったのだが、112行目から116行目にあるように、死を軽蔑し天国を思えば、神の愛は最後には階級の差別なく、誰にも等しく与えられ、救済されることを信じて祈るほかはない。

それに続くのは、カンバーランド伯爵夫人とアンが去ってしまった後の、もの淋しく、荒廃してしまったクックハムの状態の描写である。クックハムの秩序を作っていたのは、当然のことながら、ペンズハーストと違って家父長ではなく、この二人の女性であったのだ。伯爵夫人が屋敷へ到着する時は、季節は夏であったが、彼女達二人が去ると、クックハムの自然には突然秋と冬が到来する。伯爵夫人の帰館に歓喜して夏の装いを凝らした自然は、二人の不在に悲嘆にくれて反応する様子が、後の18世紀の自然詩を想起させるような、パセティック・ファラシーの手法で書かれている。太陽の光さえ弱まり、ナイティンゲールは歌わなくなり、こだまさえ答えず、物言えぬ木々は、葉の色を変え、それでも二人が引き止められないと知ると、涙の代わりに葉を落とす。荒涼とした自然に、以前の楽園は再び戻らないのである。

.....when once they [trees] knew
Of your depart, their very leaves did wither,

Changing their colours as they grew together.
But when they saw this had no power to stay you,
They often wept, though speechlesse, could not pray you; (ll. 134-8.)

このように、クックハムを *locus amoenus* にしていた自然の要素はすべて失われ、女性のパラダイスは崩壊した。屋敷自体も、埃と蜘蛛の巣に少しずつまみれて、見る影も無く荒れ果てるばかりである。(201～2行目)

家父長が常にカントリー・ハウスに留まり、妻は後継者を産み育て、豊かな自然が恵みをもたらす永遠の春の季節を謳歌する、絶対主義国家のマイクロシズムとしてのペンズハーストが、未来へむかってその存続を保証されているのに対して、女性の楽園としてのクックハムの幸せは、カンバーランド伯爵夫人母娘にとって、失われた過去の思い出になるのみである。それが、二人の永遠の不在を悲しむ自然へのせめてもの慰めであった。伯爵夫人に対しては、楽しかったクックハムでの生活は、地上の喜びの常で長続きしないものであって、来るべき天国での幸せの影なのだと思って下さるようにと、『ユダヤの王であるイエス、万歳』においてラニヤーが使っている象徴主義的聖書解釈法、タイポロジーの準拠枠に則して慰めを述べている。

Vouchsafe to thinke upon those pleasures past,
As fleeting worldly Joyes that could not last:
Or, as dimme shadowes of celestiaall pleasures,
Which are desir'd above all earthly treasures. (13-6.)

カンバーランド伯爵夫人母娘は、クックハムを去っても他のそれぞれの領地にむかったのだが、ラニヤーは、このように内面化されたカントリー・ハウスの生活の思い出を胸に秘めるのみであった。しかし、彼女には、クックハムで身に付けた詩の創作という才能が開いていた。彼女は、女性のパラダイスを、喪失と荒廃にまかせるにとどめず、また、個人の心に天国のタイプとして内面化されるだけに終らせずに、女主人、カンバーランド伯爵夫人の依頼とは言え、「クックハム邸の素描」というカントリー・ハウス詩の言説の中に不滅のクックハムを築いたのであった。

This last farewell to *Cooke-ham* here I give,
When I am dead thy name in this may live,
Wherein I have perform'd her noble behest,
Whose virtues lodge in my unworthy breast,
And ever shall, so long as life remaines,
Tying my heart to her by those rich chaines. (ll. 205-10.)

この詩の中にこそ、私の死後もあなたの御令名は生き続け、あなたの美德は至らない私の胸に宿ると謙遜の表現を用いて、真の最後の別れの言葉を述べている。カンバーランド伯爵夫人の名前が不滅の命をもつということは、とりもおさず、「クックハム邸の素描」

の付されている彼女の作品、『ユダヤの王であるイエス、万歳』の出版に対する強い自負心を物語っていたのではないだろうか。

女性のパラダイスで、当時としては破格の幸せな生活ができたとは言え、母系制家族の中で、隷属的な身分に甘んじること否定した彼女の毅然たる意志の表明として、ラニヤーが『ユダヤの王であるイエス、万歳』を出版したと推測するコイロの意見は肯定できる¹⁴⁾。従って、彼女の『ユダヤの王であるイエス、万歳』の出版は、ダンの『一周年記念詩』と同じく、パトロンを得ることを目的としていたと考えられる。ラニヤーは、ジェームズ1世の後、アン女王と王女のエリザベスをはじめ、アーベラ・スチュアート、そしてベッドフォード伯爵夫人を含め他の伯爵夫人も含めると9人もの身分の高い女性に、献呈の詩を書いており、その中にはまたカンバーランド伯爵夫人と娘アンも入っている。

『ユダヤの王であるイエス、万歳』は、図式的に要約すれば、キリストの処刑日とその前夜とを主題にして、原罪とキリストの贖罪について、従来の解釈を女性の視点から書き直す、当時にすればかなり過激な内容の宗教詩である。詩のタイトルも、ユダヤの兵士や群集が、「ユダヤのイエス万歳だつて」(“*Salve Deus Judaeorum*”)と磔になるキリストに、浴びせた嘲りの言葉に、一語“*Rex*”「王」を挿入して(*Salve Deus Rex Judaeorum*)、皮肉な罵りの言説を転覆して『ユダヤの王であるイエス、万歳』と賛美のそれに変換し、伝統に一矢報いている。ラニヤーは、イヴが原罪をこの世にもたらしたと非難する、伝統的な聖書解釈や、当時の女嫌いの社会の男達に対して、禁断の木の実の美味なる味を夫にも分け与えたイヴの優しさを称え、アダムこそ彼の知の優越の故に、イヴをたしなめるべきであったと、人類が負った原罪の責任の一端を、アダムにもあると糾弾した。

一方で、キリストの死をもたらしたのは、ユダにしる、ローマ総督のピラトにしる、キリストの裁判を主催した大祭司カヤパ、ユダ以外のその他のキリストの弟子等々、キリストの聖なる本質を理解し誤った男達の責任であったのだと主張した。それにひきかえ、女性達は、キリストの母をはじめ、キリストの処刑を諫めるメッセージを送ったピラトの妻、複数のマリヤ達、キリストが死の前に言葉をかけたエルサレムの乙女達など、キリストの聖性を真に理解したのであった。旧約聖書で問われているイヴの原罪に対する責任は、新約聖書に明らかにされている男達の重大な咎により免責され、女性のみがそのジェンダーゆえに喧しく攻撃非難される当時の世に、鋭い反論を展開した。

そのような議論の中でラニヤーは、旧約聖書のイヴ、シバの女王、デボラなどを、新約聖書や当時のジェームズ1世朝のタイプの予兆として描き出し、旧約の時代から同時代までの女性の系譜を、宗教的な要素と世俗性という相反する二つの対立軸を、バランスをもって描き出した。そして、『ユダヤの王であるイエス、万歳』を献呈された、ジェームズ1世の後、王女のエリザベスを筆頭とする高位の貴族の夫人達は、カンバーランド伯爵夫人母娘を含めて、聖書の女性たちの霊的な後継者となり、この世の終末にはキリストと黙示録的合一を遂げ、キリストの永遠の玉座のもとにおかれるという未来のヴィジョンを呈示した¹⁵⁾。

古い過去の歴史から、黙示録的な未来にいたる女性の系譜を壮大に展開する一方、随所に、カンバーランド伯爵夫人の娘の相続問題など、女性のジェンダーに起因する伯爵夫人自身の個人的な大きな辛く苦しみへの同情が表明され、かつ彼女のキリスト者としての優れた魂のあり方が称揚されている。『ユダヤの王であるイエス、万歳』の後の三分の一は、

殆ど彼女の魂とキリストについての瞑想に費やされている。後に付されたカントリー・ハウス詩において、屋敷の住人の女主人の美德が、建物の賞賛を通して行われる必要がなかった理由の一つは、宗教詩の本体の中で、彼女の賛美が十分過ぎるほど完了していたということであった。

20世紀のフェミニストのような聖書解釈学も、高位の貴族夫人達には受け入れられず、パトロンは見つからなかった。ラニヤーは、殆ど見ず知らずの人々に『ユダヤの王であるイエス、万歳』を献呈する詩を捧げたのであったが、ジェームズ1世の宮廷以外に、アン女王そしてヘンリー王子の宮廷という複雑な宮廷の関係、それぞれの宮廷における人脈の勢力関係についても、殆ど無知であった。彼女はジェンダーにより既に差別されていたのは事実であるが、ダニエルのように完全にエスタブリッシュした男の詩人ですら、どれほど神経をすり減らしていたかは、ラニヤーは近くにいながら多分知る由もなかった。

カントリー・ハウスにおける一大イベントは、大広間における惜しみないご馳走を、高貴な客人から下層の者にまで振舞う宴であった。ラニヤーは、カントリー・ハウス詩でそのような光景は描くことはなかったが、シュネルが指摘するように、貴婦人達への献呈の詩においては、丁寧なもてなしの言葉や、恰も聖餐式への招待であるかのように、彼女達にラニヤーが用意した祝宴のテーブルにつくように誘うメタファーがしばしば使われている¹⁶⁾。一例をあげると、アン女王はへの献呈の詩("To the Queenes most Excellent Majestie")において、女王は"the welcom'st guest"であり、過ぎ越しの祝いに食べる子羊は、キリストのメタファーであることは勿論、同時に『ユダヤの王であるイエス、万歳』自体でもある。

For here I have prepar'd my Paschal Lambe,
The figure of that living Sacrifice; (ll. 85-6.)

This pretious Passover feed upon, O Queene..... (ll. 89.)

どの貴婦人にとっても、ラニヤーの招待するテーブルにつくことは、彼女のパトロンになることを意味した。永遠に高貴な淑女の客がつかず、17世紀以来空席のままであったテーブルには、21世紀にはさらに精緻な研究を進める研究者達がすわるであろう。リーズ・パロルが、彼の論文でいみじくも述べているように、ラニヤーについてこれほど多くの研究成果があるにも拘らず、ことに彼女の伝記にかんしては、ある意味では、「主張することよりも、質問することのほうが多い」感を免れない¹⁷⁾。質問の答えが少しでも増えて、それが本文批評にも反映されることを信じたい。

注

- 1) Anne Baynes Coiro, "Writing in Service: Sexual Politics and Class Position in the Poetry of Aemilia Lanyer and Ben Jonson," *Criticism* XXXV (1993): 357.
- 2) Janel Mueller, "The Feminist Poetics of 'Salve Deus Rex Judaeorum,'" ed. Marshall Grossman, *Aemilia Lanyer: Gender, Genre and the Canon* (Kentucky, 1998), 105.
- 3) David Bevington, "A. L. Rowse's Dark Lady," ed. Marshall Grossman, *Aemilia Lanyer: Gender, Genre*

- and the Canon* (Kentucky, 1998), 10.
- 4) Susanne Woods, ed. *The Poems of Aemilia Lanyer: Salve Deus Rex Judaeorum*, *Women's Writers in English 1350–1850* (Oxford, 1993).
 - 5) Barbara Kiefer Lewalski, "Imagining Female Community: Aemilia Lanyer's Poems," *Writing Women in Jacobean England*, (Harvard, 1993), 213–242.
 - 6) Lear Marcus, *The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell and the Defence of Old Holiday Pastimes* (Chicago, 1986), 106–139.
 - 7) Jonathan Goldberg, "Canonizing Aemilia Lanyer," *Desiring Women Writing: English Renaissance Examples* (Stanford, 1997), 16–7.
 - 8) Don Wayne, *Penshurst: The Semiotics of the Place and the Poetics of the History* (Wisconsin, 1984), 73–5.
 - 9) Marie H. Loughlin, "'Fast t'i'd them in a gold Chaine': Typology, Apocalypse, and Woman's Genealogy in Aemilia Lanyer's *Salve Deus Rex Judaeorum*," *RQ*, LIII (2000): 174.
 - 10) Barbara K. Lewalski, "Seizing Discourses and Reinventing Genres," ed. Marshall Grossman, *Aemilia Lanyer: Gender, Genre and the Canon* (Kentucky, 1998), 55.
 - 11) Marshall Grossman, "The Gendering of Genre: Literary History and the Canon," ed. Marshall Grossman, *Aemilia Lanyer: Gender, Genre and the Canon* (Kentucky, 1998), 137.
 - 12) Mark Girouard, *The Life in the English Country House: A Social and Architectural History* (Yale, 1978), 166–9.
 - 13) Barbara K. Lewalski, "Rewriting Patriarchy and Patronage: Margaret Clifford, Anne Clifford, and Aemilia Lanyer," *YES* 21 (1991): 93.
 - 14) Coiro, *Ibid.*, 353.
 - 15) Loughlin, *Ibid.*, 135.
 - 16) Lisa Schnell, "Breaking "'the rule of Cortezia'" Aemilia Lanyer's Dedications to *Salve Deus Rex Judaeorum*," *JMEMS* 27 (1997): 84.
 - 17) Leeds Barrol, "Looking for Patrons," ed. Marshall Grossman, *Aemilia Lanyer: Gender, Genre and the Canon* (Kentucky, 1998), 137.